

〔研究ノート〕

野崎参りの風景

——近世大坂の近郊社寺参詣の一事例——

谷 口 廣 之

〔献 辞〕

前田先生は常に温かい包容力をもって教育に取り組まれ、学生たちから大いに慕われる教育者であられた。そして時代を先取した新しいツーリズムの提唱者であり構築者であり優れた観光学の研究者であられた。先生の早すぎのご逝去を悼み、日本の伝統的ツーリズムの一形態である社寺参詣に関する小稿をもってご霊前に捧げます。

I 野崎参り

鉄道で全国を旅した田山花袋は、1910年代に『日本一周』と題する紀行文集を刊行している。その前篇で京都、奈良を経て大阪を訪れ、

大阪の郊外は東京や京都に比べることは出来ない。京都の持ったやうな山は無論ないし、東京の持ったやうな林のある野もない。生駒と金剛とが遠く五六里を隔てゝその翠色をみせてはゐるが、これとて、さう大して人の心を惹くやうなものではない。到る處田と畑との無趣味な連続を見るばかりである。唯、晩春のころ、菜種の花が一面に咲いて、それにかげろふが靡いてゐるのが暢気な位なものだ¹⁾。

と述べ、さらに

郊外としては、大阪は甚だ振はないが、しかし周圍に立派な名勝地を澤山に持つてゐる。それが大阪の特色といへば、特色である。それに、汽車だの、電車だのゝ交通が頗る便である。東は櫻宮線で生駒・志貴などにも行くことが出来るし、關西線で、河内の楠公の址の方から奈良の方へも行くことが出来る。南は堺から濱寺あたりまで電車がある。北は箕面が大阪市の公園になつて、矢張り電車を通つてゐる。西は寶塚・有馬・神戸・須磨・明石などへもすぐ行くことが出来る。郊外を持つてゐない大阪人は、却つてこれ等をその郊外としてゐるやうな観がある²⁾。

と述べている。北は六甲山系から、東は生駒山地、葛城・金剛の峰々、さらに南の和泉山地に抱かれるようにして大阪の平野部は圍繞されていて、その中心部から円を描くように「名勝地」が展開しているという構図は花袋の指摘するとおりである。明治以降、大阪を起点とする鉄道がそれらの「名勝地」を繋いで行楽の足となった。そのことは「鉄道以前」においても事情は大きく変わらない。鉄路ではなく徒歩で、という手段の相違はあるが、近世の大坂住民の四季折々の行楽地はほぼ同様な顔触れである。花袋は先の文章に続けて

野崎の観音は大阪近郊では、殊に名高い流行佛である。五月一日から十日間は臨時汽車を出しても参詣者が乗り切れないといふ程である。それに、その時分は丁度菜の花のさかりで、一面に黄色い毛氈を布いたやうなので、それを見にわざ／＼出かけていく人も多い³⁾。

と記して、野崎参りの賑わいに触れている。この賑わいもすでに近世に遡る光景であつた。

『河内名所圖會』はその様子を次のように描く。

桜花匂ふ頃、野崎の観音の無縁経まゐりとて、難波男なには女の、

楼船にて行もあり、又陸をさざめきてまゐるもあり、みな春色の風興なるべし。

啼ながら 雲に眠るや 遠雲雀⁴⁾

船に乗るもの、陸路を行くもの、遠くに雲雀の囀りを聞きながら、長閑な春の行楽であった。もちろん野崎「参り」という社寺参詣であるから単なる遊山とは異なるものの、信仰と行楽とが縋り交ぜられた近世期の参詣の姿である。

いうまでもなく野崎参りは通称である。正確には旧暦四月一日から八日まで福聚山慈眼寺で催される無縁経法要への参詣である。

享保六年（一七二一）三月、前年から続いていた観音堂の修理が完成した。このため、三月十八日から四月十八日までの間、落慶供養が行われ、同時に秘仏である本尊が特別開帳された。野崎観音は二十五年に一度の開帳を基本としているが、享保六年の開帳は、記録に見える野崎観音の開帳では、最も早いものである⁵⁾。

既にこの頃には、野崎参りは盛行の様相を呈していた。この開帳が行なわれた同じ年の七月に上演された近松門左衛門作『女殺油地獄』には賑わしい野崎参りの様子が描かれている。

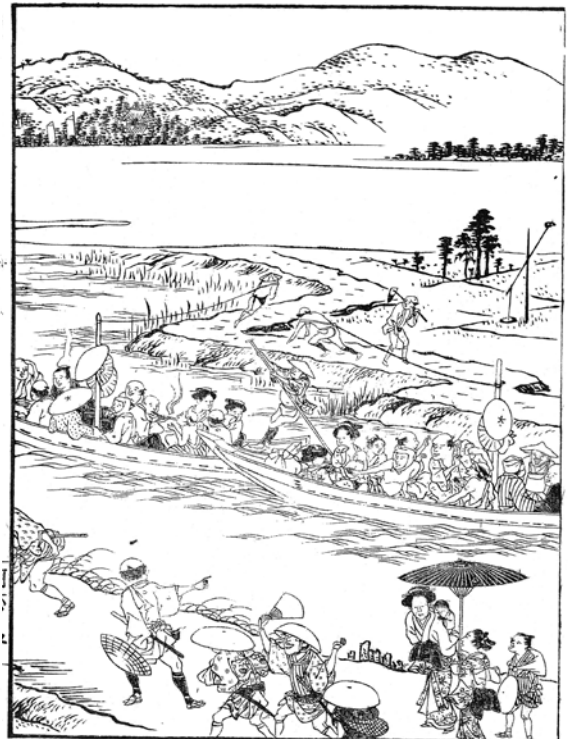
鯉川よりゆら／＼と・野崎参りの屋形船・卯月半ばの初暑さ、末の・閏に追ひ繰りて、まだ肌寒き川風を・酒にしのごてそゝり行く……桜過ぎにし山里の・誰訪ふべくもなかりしに、老若男女の・花咲きて・足を空々空吹く風に・散らぬ色香の伊達参り・大人、童も歌ふを聞けば・行くもちんつ・帰るもちんつ・また来る人も、ちんつ、ちりつて・チリテツテ・伝を頼みの乗合船は・借り切るよりもとく庵堤・艫に舳先を漕ぎ付けて、よそも一つの舟の内……四筋に分れ・玉鉦の・これより巽奈良街道・うしとら角は八幡道・玉造へは・坤・西はもと来し京橋や、野田の片町・大和川・こゝは名に負う寿命の松・御代長久の岡山を・歌には忍びの岡とも詠み・佐良々山口一つ橋、渡して救う御願力・無量無辺の聚福閣・慈眼視衆生念彼観音・身得度者の御誓ひ・問うも、語るも、行く船も、徒歩路拾ふも諸共に、迷ひを開く腰扇、御堂に・ねんじゆを繰り返す⁶⁾。

ここで「西はもと来し京橋や、野田の片町・大和川」とあるのは、大坂市中からの参詣者が、京橋を起点として西へ進み、片町を経て、「伝を頼みの乗合船は・借り切るよりもとく庵堤」と徳庵川の船参詣の有様がうつし出されている。

このような船行きと陸行きの双方が織りなす野崎参りであるが、陸と川とで参詣人同士が言葉争いをするのが野崎参りの風物であった。寛政六年（一七九四）に開板された『虚實柳巷方言』は「浪速の遊里に関した種々の事を書きとめた」⁷⁾ものであるが、同時に当時の大坂の年中歴も含んでいる。その中で野崎参りに触れて、

四月 朔日 二日より八日迄野崎参りのふり賣喧嘩いざりよといへば錢がないかとひさしい詞も一興なるぞかし⁸⁾。

と述べている。ここにいう「ふり賣喧嘩」が言葉争いである。「いざりよ」と言葉を浴びせるのは陸側からである。船側に「何故歩かないのか」とからかうのに対して、舟側からは「船に乗る錢がないのか」とやり返しているのである。『河内名所圖會』にはその「ふり賣喧嘩」の光景がある⁹⁾。



陸側、つまり図の中央に描かれている堤の上の三人の男、とくにその後尾の男は笠を左手にして右手は船を指差している。一方、舟側からは諸肌脱いで頬かむりした男が右手を堤側に突き出し、その隣の男も袖をまくしあげて喧嘩腰の様子である。やりとりの内容は不明だが、面白おかしい口論が交わされているのであろう。同船している者はこのやり取りを笑顔で眺めている。右手の男は大きく口をあけて笑い、左手に乳飲み子を抱えた女性は口元に袖を当てて頬笑み、その後ろの小童も笑い顔である。片や、船の反対側、艫の辺では口論騒ぎには無関心な僧たちの談笑の輪ができてあがっている。

川筋全体を眺めると、川上には屋形船が一艘、それに続く乗り合いの舟が二艘、川を遡っていく。陸では、手前に商家の女将が子を背負い、侍女が日傘をさし掛け、荷物持ちの小僧がそれに従っている。図の左端には、酒・肴を商う店が出て、鍋には田楽風のものがかえ、客に酒を注ぐ男の姿がある。その真上に酒樽を二人で担ぐ町人の姿。田には、蝶を追う子どもとその母親らしき人物、道の上手には二本差し侍とその従者などなど、文字通り、老若男女、上下貴賤、陸川の別なく、図の正面の奥、霞の中に描かれた慈眼寺を目指す道行である。

Ⅱ 野崎観音の歴史と伝承

それでは福聚山慈眼寺とはどのような寺院であるのか。近世期の地誌によれば
○河内國名所鑑¹⁰⁾

野崎観音、福壽山慈眼寺十一面観音御長三尺、行基御作、昔多田祐庵鰐の頭骨寄進也、聞しより見ておそろしき物也、観音堂よりふこうの池を見おろし、よき景也、
狂歌災難をはらはせ給ふ観音の

弓にそふ矢ののぎきなるらん 松縁

野崎なる藤や観音の力こぶ 保友

○河内志¹¹⁾

慈眼寺【在野崎村有石塔刻曰永仁二年秦氏建】

○河内名所圖會¹²⁾

福聚山慈眼寺【野崎村にあり。禅宗，曹洞。】

本尊十一面観音【唐作。長三尺五寸。又，三十三所観音像，江口君の像，俱に本堂に安す。】

薬師堂【本堂の南にあり。】

阿弥陀堂【薬師堂の傍にあり。】

羅漢堂【十六羅漢，四天王を安す。】

鐘堂【鎮守の傍にあり。】

寺説云

夫，当山は，南天竺波羅奈国大悲の聖蹟を摸して，古利たる事，年既に深し。今に至て，寺前の沢を，人呼んで波羅奈澤といふ。惜哉，中古以来，伝記喪びて，只，郷童の口碑を證とす。故に，開闢の年代，事實，詳ならず。大悲尊像も，何人の刻める歟。寺宇の権輿も分明ならず。抑，一条院ノ御宇に，摂州難波江の渡口に住して，ゆきゝの旅客を饗す美女あり，世にこれを江口君といふ。ある時，沈痾に罹て，医療の験さらになし。常に聞けるは，和州初瀬寺の観世音，靈應殊に勝れさせ給ふ。既に，かの地に参籠して懇に禱り，一七日の満願の時，靈夢を感じ。端嚴たる高僧来りて曰，河州野崎福聚山は我山に異ならず。其所の大悲に懇求せば，所願空しからず。妓女，夢覚て歓喜し，直に尋て此山に來り，本尊を敬礼，七昼夜に満ぬれば，忽，病悩治癒す。これより，伝聞て，四來の緇素，遠村，近郷こゝに群す。又，野崎を去る事二里許にして，御供田と名づくるものは，当寺の設に宛むる也。厥后，龜山帝の朝に，権大僧都實慶，当山に寺職して弘長元年に寺記を書り。又，伏見院の御時，沙門入蓮こゝに住して，衰弊をかなしみ，力を優婆塞秦氏に勦て，重修せらる。此時に立る石塔婆，今に存す。又，其後，永祿八年，松永久秀志貴城に籠りて，近隣動乱の時，佛閣，兵燹に罹て灰燼となる。漸，本尊，實慶の寺記のみ遺れり。其より，今の如く，再営あり，春は無縁経とて桜花匂ふ頃，秋は紅葉して山々錦なるふし，浪花津の老少，こゝに群じ，あるいは川舟に棹さして，道ゆく人と言葉戦いして，詣する輩多し。是を野崎参と云。

これらを総合すれば，まずその開創と本尊十一面観音の造立が行基に託されていること。長谷観音の靈夢を蒙った江口の君が中興したこと。入蓮が秦氏の協力を得て修復したこと。『河内志』がいう「在野崎村有石塔刻曰永仁二年秦氏建」はその物証であり，石造九重層塔として境内に現存するが，戦国期の内乱で寺は灰燼に帰したこと。江戸期に入って再興され，「浪花津の老少，こゝに群じ，あるいは川舟に棹さして，道ゆく人と言葉戦いして，詣する輩多し」という活況を呈するようになったこと，などが骨子となっている。「道ゆく人と言葉戦いして」は，先節に見た「ふり賣喧嘩」のことであるが，これについてはあらためて後述する。

さてこれらの史料が，古代から近世に至る慈眼寺の寺史の骨組となるわけだが，残念ながら戦国期以前については確たる史料が存在しない。『圖會』が「惜哉，中古以来，伝記喪びて，只，郷童の口碑を證とす。故に，開闢の年代，事實，詳ならず。大悲尊像も，何人の刻める歟。寺宇の権輿も分明ならず」というように，「口碑を證とす」るしかないのである。したがって『大東市史』が，慈眼寺の歴史を説明した後で，「以上は，その宝永五年（一七〇八）に新鑄された現在の釣鐘に，五世の大真和尚が記したこの寺の由来のあらすじである」¹³⁾というように，『大阪府史』など他の書の類も，次に挙げる現在の釣鐘の銘文を踏まえて慈眼寺の古史を綴るのが通例である。少し長い引用となるが，慈眼寺の歴史を史料するうえでの数少ない史料である。

河州讃良郡野崎邑福聚山観世慈眼／禅寺者，不知権輿。於何代伝曰，人王六／十六代一條院御宇，有名伎，居摂州難／波郷。世是曰，江口長者。一時疾病，万医／拱手祈之，和州初瀬寺之観世音，

其夜／夢異僧告白，河東之福聚山者，不異我／山。彼地者即南天竺波羅奈国之一峰／而，施無畏大士垂迹之靈場也。近汝家，／到彼懇求得免苦患。長者夢覺，疾奔臻／当山果而，十一面大悲像，完然於破宇／之下。即今堂上之尊像，是也。長者於是，／至誠誓祈七昼夜，而病悩頓廖。不堪感／喜，即竭力，重関・宏基丕建伽藍殿宇莊／麗而，卓瑩一邦也。後迄龜山帝弘長元／年，実慶来主此山，作寺記。又当伏見院／統御，入蓮勳力，於秦氏重修，于時永仁／二年也。所建之石塔，今尚在矣。永禄八／年，三好之嬖臣松永彈正，弑將軍義輝／公襲。此時，弊織田信長公，窺京兆，于是／五畿騷怖，七道震驚，罹斯喪乱。我山仏／閣僧坊，咸成灰燼，而大士之尊像，儼然／独存。慶長元和之間，有青崑者，洞下之／英衲也。構宇安像，傍結蘆居嗣。後洞下之／末系絡繹而，住持口法伯実巖，戻止／重造觀音殿。厥後，我師南公，亦来住三／歳，偶応衆檀之請住，和之，東長竟解，邱／再来此地，定隱棲之計，新宮丈室。倏然／而，居東平山腰，造一堂，安無量寿仏之／像，尋常际觀音堂，陋弊不勝悽感。雖有／志重興，年老神疲無争。何故命余嗣席。／旦顧言，以大悲殿侈新，余於是歛，然発／恢復之志，図募諸方，加鉅構。緇白奔湊，／驩乎助之，各自披榛奔，夷岩址，聿建觀／音殿。視旧制倍之。又改造旧堂，安藥師如来之像，繼添修丈室，新構齋庖及寮／舍等。凡宜有者，多叟作之，雖不能復旧，觀山林之氣象，由是煥然一新矣。唯以／鐘鼓未備，為欠典時，有退休者謂余曰，／夫鐘者，上自朝廷，下及僧舍，凡警晨昏／齊進上。必籍于斯物。今也花宇施張，当／宜処衆。何不設鐘為禪誦之助哉。某当／行乞翼成之，余然其言即命之，募化遐／邇之人民，檀施殷集，於之命治工鑄成／載太夥，抗功德乎。冥途即苦，具為之，頓／意形神用乎。関内即嚮懷為之，頓碎毘／世作禎，振古如茲。其妙用，不可勝計擢。／惟玄運邇邇，人事代謝，寺宇之興廢，器／物之成壞，或草或鼎，余当衰否之運，極／力砥礪，備嘗辛苦，漸以復興料知前哲／之功烈。亦応不容易。余創守之艱難，修／興之勲績，不可以不紀。草創之旧記，寂／寥無聞。実慶雖作記，故紙蠹損，而宇不／全。入蓮雖建塔，勒石雨洗風磨，文半滅。／余於是懼寺記不伝後世，故欲記興替／之顛末，彫之新鐘，併而伝不朽，而忘蒙／授筆，且系以銘。銘曰……略……

宝永五龍戊子三月望

前往永平当山第五世門大真撰

(大真)(慈門之印)

鑄工

当国茨田郡牧方之住

河内大目藤原家成¹⁴⁾

ここでは本尊の行基造立の記事はなく、江口の長者(江口の君)の故事から始まる。病を得た江口の君が長谷観音に参籠し、福聚山の慈眼寺を頼るように夢告を受け当寺で祈願したところ恢復の験を得た、その恩に報じるため荒廃していた寺を再興したというものである。いわゆる観音利生譚であるが、直接に当寺の観音利益を語るのではなく、まず長谷観音を経て縁起を結構するのはなぜだろうか。長谷観音の信仰の系譜につなげることで権威化が図られているのか、「大和の長谷観音を中核とした観音信仰が、当時の河内にも展開した」¹⁵⁾ からののか、あるいは観音信仰を奉じて大和・河内を往還する聖たちの唱導活動との結びつきを示すものであるのか、などなどさまざまな側面から考えることは可能ではある。

一つ注目したいのは、慈眼寺蔵の「観音像御影版」である。「禅寺で新旧住持の交代に際して作成された寺院の資材帳」¹⁶⁾ である「慈眼禅寺交割課」には大小二つの「観音像御影版」の記載がある。小版の方は「嶺南が修理した」とあり、「歴代住持はこのような観音像の版木を修復・新造して版面を起こし、参詣者に配布したのであろう」と推測される。「像容は右手に錫杖、左手に水瓶を執る長谷寺式十一面観音であり、光背の形式からみても、秘仏である本尊を忠実に写したものである。台座は岩座で表すなど、現存の本尊とは違う古い時代の形態がみえる」とされている。もう一つの大版の方は「観音像開版 古来有 smaller. 大真代所開版、大者也」とあって五世「大真が置いた大形の観音像版木に比定できる」もので、「図像は長谷寺式十一面観音像であり、岩座や光背の形も」小版と「共通する」ものであ

る¹⁷⁾。

通常、十一面観音像は左手に蓮華を挿した水瓶、右手は施無畏印を結ぶが、長谷寺の観音像は水瓶は持つけれども、左手には錫状、足許は岩座という独特の形式である。これを長谷寺式十一面観音像というが、慈眼寺の観音像もこの長谷寺式なのである。ここに長谷寺と慈眼寺に通底する観音信仰の歴史をうかがうことができるだろう。

さらに江口の君とのつながりが問題である。江口の君という名において、一般にまず想起されるのは、江口の地で西行が遊女と交わす和歌説話である。『撰集抄』『沙石集』『十訓抄』『新古今和歌集』などにも採られた著名な説話である。のちにこれが謡曲にも引き継がれ世阿弥作「江口」（以下「江口」と略）という曲になる。ただ「江口」では、前場はこの西行との歌の贈答の説話を下敷きにしてはいるが、後場は遊女の霊が最後は普賢菩薩に、乗っていた舟は白象になって西の空に消えるという展開になる。この後場の話の出所は『古事談』などが採る性空上人の説話で、上人が「生身の普賢を見奉るべき由祈誓し」たところ、「生身の普賢を見奉らむと欲はば、神崎の遊女の長者を見るべし」¹⁸⁾という夢告を受け、訪ねてゆき、舞姿を見、目を閉じれば普賢の姿、目を開ければ遊女の姿、という不思議な体験をするという話である。「江口」では前場と後場の間の間狂言でアイの里人が

播磨の国書写の開山性空上人 さる奇瑞を御覧ぜられこのところへおん出でなされ候へば これなる川音が 法華經の観音品を唱へ申し（中略）今の江口の長は 生身の普賢菩薩と現はれ¹⁹⁾と語るが、さる奇瑞とは夢告のことであり、この夢告の主は書写山門教寺の本尊である観音菩薩でなければならない。

江口・神崎は、古代から淀川の河口部に位置して、京につながる河港であるとともに遊女の屯する歓楽の巷でもあった。大江匡房は『遊女記』において、その遊女たちの名を列記する。

山城国と渡津より、巨川に浮びて西に行くこと一日、これを河陽と謂ふ。山陽・西海・南海の三道を往返する者は、江河南し北し、邑々処々に流れを分ちて、河内国に向ふ。これを江口と謂ふ。蓋し典葉寮の味原の牧、掃部寮の大庭の庄なり。摂津国に到りて、神崎・蟹島等の地あり。門を比べ戸を連ねて、人家絶ゆることなし。倡女群を成して、扁舟に棹さいて旅舶に着き、もて枕席を薦む。声は溪雲を遏め、韻是水風に漂い飄へり。経廻の人、家を忘れずといふことなし。洲蘆浪花、釣翁商客、舳舻相連なりて、殆に水なきがごとし。蓋天下第一の楽しき地なり。

江口は観音が祖を為り。中君・□・小馬・白女・主殿あり。蟹島は宮城を宗と為り。如意・香炉・孔雀・立牧あり。神崎は加菰姫を長者と為せり。孤蘇。宮子・力命・小兒と為せり。（中略）

長保年中、東三条院は住吉の社・天王寺に参詣したまひき。この時に禅定大相国は小観音を寵せられき。長元年中、上東門院また御行ましましき。この時に宇治大納言は中君を賞ばれき。延久年中、後三条院は同じくこの寺社に幸したまひき。狛犬・犢等の類、舟を並べて来れり。²⁰⁾

この「禅定大相国」すなわち藤原道長と「小観音」については、『古事談』に後日談がある。

御堂、遊女小観童【観音の弟なり】を召す。御出家の後、七大寺に参らるる時、帰洛に河尻を経たり。其の間小観童参入す。入道之れを聞きて頗る赭面して、御衣を給ひて之れを返し遣らる、と云々²¹⁾。

また喜多村信節は『画証録』において

遊女が名、さまざまなれど、仏の名、釈家の語など付たる多し。是又流行によれる也。書写上人が生身の普賢菩薩に見たりといへる遊女が名、たれともなけれども、普賢といひしなるべし。宗盛の愛せしゆやという女は、南嶺子に、くまのとよむべし。長秋記に遊女久万乃とのせられたり²²⁾。

と記している。

このようにして江口は、地名であり、その地の遊里の名であり、その遊里の遊女の名でもある。そしてその中には観音や普賢、小観音などの仏名を名乗るものもあった。また『法然上人絵伝』²³⁾にあるような遊女の往生譚、発心譚は数多く伝えられている。

そしてこの江口と慈眼寺は旧大和川の流路で、また淀川右岸の陸路でつながっており、さらにその道

筋は生駒の山系の峠道を超えて大和長谷寺にも伸びていく。

飯盛山の西に突出する尾根の上に建てられたこの寺は眼下に難波の入江の名残である深野の池を見下す景勝の土地であったから、奈良・平安時代から此处に寺が建てられていたことは疑いが無い。

(中略) 江口と野崎は水路によって直結されていた。江口から淀川を下り、高瀬で大和河を溯行し、恩智川の水流に棹させば、舟は野崎観音の門前に着く。²⁴⁾

こうした地勢にあつて、ここを往還する廻国の聖たち、あるいは遊女たちの中に、江口と慈眼寺と長谷寺を結ぶ物語が仮構され、野崎観音の縁起として織りなされていったのではないだろうか。

Ⅲ 野崎参りと河内平野

野崎観音に対する信仰が広がり、野崎参りが盛んになるのは、近世期に入ってからであるが、元和年中に清唄が現伽藍を再興し、四世嶺南、五世大真の代に隆盛を迎える。ことに大真の業績が大であった。先に「観音御影版」とその配布について述べたが、そのような唱導活動・勧進活動に積極的に取り組んだのが嶺南であり、梵鐘銘を撰した大真であった。その取り組みの一つが、本尊の開帳である。

野崎参りがはじまると、当時の五世大真和尚は、寺運興隆のために積極的に参詣者の誘致にのり出した。景色も気候も一番よい四月の一日から灌仏の日の八日まで、無縁経の法要を営み、二五年に一度の開扉ときめられた秘仏の十一面観音も特別に開扉する。しかもそうした御開帳の立札を大坂町中のあちこちに立て市民に宣伝した²⁵⁾。

現在慈眼寺に明治期の「無縁経執行版」と呼ばれる版木があり、41・5×29・0 cm とかなり大判のものであるからこの立札などに利用されたのであろう。ただ版木に示された「法要の日程が五月一日からになって」いるのは「明治六年(一八七三)に新暦が採用された」²⁶⁾からである。おそらく近世期にも同様のものが作られていたのであろうと推測できる。『摂陽奇観』や『近來年代記』によれば、享保4年・文政3年・嘉永2年と慈眼寺の開帳記録が残っている。²⁷⁾

こうした寺側の努力をさらに後押ししたものがある。いわゆる「お染久松」の物語という文藝・芸能の力である。小川嘉昭氏に拠れば、お染久松の物語には次のようなものがある。

- 数種の歌祭文(最初のものは宝永七年(一七一〇)頃)
- 『心中鬼門角』(歌舞伎・宝永七年(一七一〇))
- 『袂の白しぼり』(浄瑠璃・紀海音作・宝永七年(一七一〇))
- 『卅三年忌袂白絞』(歌舞伎・松屋来助他作(推定)・元文五年(一七四〇))
- 『染模様妹背門松』(浄瑠璃・菅専助・明和四年(一七六七))
- 『新版歌祭文』(浄瑠璃・近松半二作・安永九年(一七八〇))²⁸⁾

これらの中で、お染久松の物語の設定を野崎村とした最初は『袂の白しぼり』であり、やがてそれが『新版歌祭文』に引き継がれ、この物語と野崎村との関係を確定していくのである。小川氏は次のように指摘する。

『袂の白しぼり』で久松の在所を野崎村としたこの設定が、七十年後の『新版歌祭文』に引き継がれ、「野崎村の段」に発展した理由については、まず、当時の野崎参りの流行が挙げられる。「野崎村の段」の詞章に「観音様」「野崎参り」の語が二度ずつ使われていることや、この段の最後が、久松が竹輿で堤を帰り、お染が船で川を帰るという、当時の野崎参りの風物を意識した演出になっていることから、半二自身、「野崎参り」の流行を意図的に当て込んでいることが分かる²⁹⁾。

すなわち、物語の側からは流行の野崎参りを舞台設定として利用し、慈眼寺の側からはそれによってさらに野崎参りの知名度が上がり、多くの参詣者を迎え入れることができるという相乗の構図が成り立っていくのである。さらに小川氏は「お染久松の心中事件が「油屋」で起こった事件である」ことに着目し、「実在の「野崎村」の位置する地域(現在北河内と称されている地域の、特に南部)で、菜種栽培が盛んであったこと」をその背後に想定し、

少なくとも、「お染久松」の心中事件から「野崎村の段」が成立する安永九年までの七十年間は、北河内南部の地域で菜種作が盛んになる時期ではあった。そしてこのような社会状況によって、前述のように、「油屋」で起きた心中事件を素材にした芸能作品が、その興行的意図とともに、菜種を供給する地域の地名である「野崎村」と結びついていったのであろう³⁰⁾。

と推論する。実際、菜種畑の景観は野崎参りには欠くべからざるものであり、後年、今中楓溪作詞・大村能章作曲で大ヒットする「野崎参り」の曲が、「野崎参りは屋形船でまいる／どこを向いても菜の花ざかり／粹な日がさにや蝶々もとまる／呼んで見ようか土手の人」と描き出すのはまさにこの景観である。さらに「呼んで見ようか土手の人」とは名物の「ふり賣喧嘩」であり、文字通り野崎参りの代表的風景を詠みこんでいるといえるだろう。

こうした菜種畑の景観は、近世における河内の河川の付替えが大きく関係している。有史以前、河内はその名が示すごとく、上町台地を西に、生駒山系を東として河内湖と呼ばれる内湾であった。やがて淀川・旧大和川などの河川が運ぶ土砂の堆積などによって低湿地となっていく。そのために繰り返し河川の氾濫によって大きな被害を被らねばならなかった。そこで企てられたのが大和川の付替えである。

宝永元年（一七〇四）二月から一〇月にかけて、大和川を河内国志紀郡柏原村から堺方面へ、すなわち真西へ付け替える普請が行なわれた。それまで大和川は、柏原村の南で、南から流れてくる石川を合わせたあと、北方向に流れ、大坂城の北で淀川と合流していた。古代以来、大和川が流れる中河内を中心とする地域は水害頻発地域として知られていたが、この付け替え普請により、淀川と大和川は分離され、当該地域は大和川の水害から免れることになった。（中略）付け替えにより、柏原以北の旧大和川の川筋は用水路となり、川床や堤防敷地は新田となった³¹⁾。

これによって鴻池新田や平屋野新田といった多くの新田が生まれるとともに、新たな水路が整備されていくことになる。

水田耕作にとって灌漑用水が必要であるのは勿論であるが、とくに低湿地においては悪水を排除することが、それ以上に重要であった。河内低地における悪水の事情も全く同じであり、新田開発と共に多くの悪水排水路（悪水井路）が設けられた。

大和川付替え以前からすでに寝屋川の流れと新開池へ流入する菱江川とを分離するために、明暦元年（1655）に池の西堤が切り開かれて「徳庵川」が開削された。新開池の東南にある村々によって、この徳庵川へ悪水を抜くための「六郷井路」が掘られ、同じように北河内の低湿地帯でも悪水排除のために「鯉江川」が改作された。さらに、大和川付替え後にも新田の開発が進められるとともに多くの悪水井路が掘られた³²⁾。

その一つとして、深野新田に幅約七メートルほどの水路が掘られ、野崎参りの舟は、大阪市中から徳庵川（寝屋川）を経てこの水路を利用した。それがいつしか野崎参りの川筋として観音井路と呼ばれるようになっていくのである。市中からの出発地は八軒屋浜。京・大坂を行き来した三十石船の港である。徳庵川（寝屋川）を溯って角堂浜で下船。現在、その地に住吉神社が祀られている。「そこから観音浜まで田舟に乗り換えて行く者もあった」³³⁾。ここにも今は観音浜の碑が建てられている。

ではどのような舟が野崎参りには用いられたのであろうか。『河内名所圖會』が描くように、まず屋形船である。大阪城天守閣蔵の南木コレクションの中に「御座舟賃定書」という引札がある。これは「大坂本町橋西詰角」の「山本屋勘太郎」の版で、行く先別にその船賃が記されている。たとえば「川内地廻り」の項には、

- 一 小屋形 四百三十文
- 一 紅梅 七百十四文
- 一 式人衆 壱〆五百卅文
- 一 三人衆 壱〆九百卅文

とあり、舟の種類や人数で料金が定められていることがわかる。この「川内地廻り」のほか「神崎尼崎」「住吉、今福村、伝法、木津川尻、長堀」などと並んで次の項目がある。

野崎守口

- 一 小屋形 七百八十文
- 一 紅梅 壹匁文
- 一 貳人衆 壹匁九百卅文
- 一 三人衆 貳匁貳百五十文³⁴⁾

ちなみに幕末ころの東海道の各宿場での「旅籠代が二〇〇文から三〇〇文、中食代（昼食代）が八〇文から一三〇文」³⁵⁾、また江戸大坂で屋台のそば・うどん一杯が十六文という当時の相場からすれば決して安いものではない。もちろん野崎参りの舟はそのような屋形船だけではない。もっと庶民的で安価な乗り合い船もある。前掲の『圖會』が描く野崎参りの図には、川上に小さく屋形船が一艘、手前に乗り合いの舟が二艘描かれているが、乗り合い船はいずれも十人以上の客を乗せており、川の流に逆行することもあるが、船頭が舟に棹さすだけでなく、堤の上から引き綱を引く人の姿が見える。流れに逆らって舟を曳航するために引き綱を用いることは、淀川の三十石船においても採られている術でもある。これらの乗り合い船は、通常は客を運ぶ船ではなく、剣先舟・柏原舟と呼ばれて、河内の水路を、あるいは河内の農村地帯と大坂市中をつなぎ、農産物などの物資・肥料などの商品を運ぶものであったが、ここに毛氈あるいは蓆を敷いて客舟としたのである。

大和川は、古代以来、大阪と奈良（大和）を結ぶ水運ルートとして利用されてきたが、とくに近世にはいって急速に商業的規模での水運が発達した。この近世大和川の大坂側流域で水運を担ったのが「剣先船」と呼ばれる荷船である。この荷船は、大和川の付替えを境にルート・経営形態に変化はあるものの、上り荷として油粕・干鰯、下り荷としては年貢米などを積み込み、大和川とその支流で手広く賃積み稼ぎに活躍した。³⁶⁾

さらに通常は農作業に用いられる田舟と呼ばれる簡素な舟も参詣者を運んだ。上方落語「野崎参り」では、喜六清八の二人連れが途中から舟に乗ろうとするがその舟が肥舟であることに尻ごみする場面がある。田舟は農作業や移動手段として以外に、肥舟として市中で買った肥料としての糞尿を運ぶ船でもあったのである。こうした舟は「三枚板」とも呼ばれていた。現在、大東市歴史民俗資料館には最後の舟大工といわれた東野種市氏の製作になる「三枚板」が所蔵されている。野崎参りで潤ったのは慈眼寺だけではなく、近在郷民の一時稼ぎの時でもあったのである。

こうした船のみならず、参詣人を相手に茶屋を営もうとする近在郷民も現れた。次に挙げるのは慈眼寺に願い出た人々の連書である。

一札之事

- 一 御当地観音様御法事二付、
私共にうり茶屋仕候。就夫御法
度之趣被仰渡、委細承知仕申候。
其趣一書を以手形仕候条々。

以下、火の用心に念を入れること、博打を行なわないこと、怪しいもの（うさん成者）に宿を貸さないこと、喧嘩口論しないこと、もしその節は自分たちで鎮めること、魚類の商売をしないこと、遊女を置かないこと、などを誓約し、

右之通堅相守可申候。為後日手形
仍如件。

享保二十一年丙辰三月二十五日³⁷⁾

と結んでいる。日付からして、四月から始まる「無縁経法要」を目前にした申し入れである。末尾に署名が連なっているが、計四十五名にうち、野崎村や「水はい村」、深野新田など近郊の村落からの者に交じって大坂などからも出張ってきていることから、相当数の参詣人と商いの規模が見込まれていたであろう。

このような賑わいの中、野崎観音に参詣した者にとって大きな楽しみは、陸行・河行を問わずその参

詣道の景観であったが、さらには慈眼寺からの眺望であった。

東高野街道を歩いていて、「浜」の付く地名があることが気になった。淀川と河内湖が河道でつながり、生活物資や生産物を出荷していた湖港の名残であろうか。今は工場と住宅地に変わってしまったが、この辺りまで湖の香りや葦原や蓮池を渡る風が街道を往還する人々を慰めていたとすれば、これも喜ばしいことだ。（中略）東高野街道に戻り北進すれば、すぐ野崎の地である。野崎に来れば慈眼寺にお参りせずに素通りすることはできない。長い参道を進み、急な石段を登るとそこに大阪平野を一望の下に見渡せる。（中略）慈眼寺を高野街道から見上げていると、河内湖の灯台の役目をした寺との印象を強くした³⁸⁾。

寺域は高所にあるを以て、遠景近色の眺望に富み、特に春は櫻花の匂へる頃、秋は樹梢の紅葉して錦なす頃、無縁経を修しければ、賽者群集して立錫の地を餘さず³⁹⁾。

蕪村が「菜の花や月は東に日は西に」と詠じた景観は「蕪村が生まれた淀川左岸の菜種作地帯の印象」⁴⁰⁾であり、その黄色に染まった眼下の景観、そして見渡す大坂市中、その彼方に難波の海が望まれたのであった。

匂は、河内平野辺りの景であろうか。暮れなずむころの、夕暮れ迫る時分であろう。見渡す限り菜の花畑が続く、辺り一面黄色く染まり、月が東の空に上り、太陽はなお西に空にあって明るさがひととき増したように思われ、不思議な幻想的な美しい眺めである⁴¹⁾。

この「月は東に」の句も含めて、蕪村には菜の花を詠んだ句が多い。おそらく蕪村の原風景がそこにあるのだろうが、「菜の花や和泉河内へ小商」⁴²⁾などの句も、菜の花畑の中を行商する小さな人影が黄色く染まった河内平野を行き来する情景が印象的である。

Ⅳ 悪態の民俗

最後に野崎参りの「ふり賣喧嘩」について触れておきたい。この舟と陸とで交わされる言葉戦いは、野崎参りの名物であった。上方落語「野崎参り」では

ちょっと陸を見い。え、ぎょうさん歩いてくるヤツがあるやろ。あれつかまえて喧嘩するねん / 喧嘩するちゅうたかて、船の中と陸の上。石投げられたら、逃げ場がないがな / 野崎参りの喧嘩は言い合いばかりで、どつき合いはない。これに勝ったら一年中の運がええ、ちゅうねん⁴³⁾。

という喜六と清八のやりとりを皮切りに、陸と船との珍妙な口喧嘩が繰り広げられていくが、社寺参詣にこうした悪口・悪態が許されるという例は他にも多くある。著名なものとしては、西鶴が『世間胸算用』で採り上げている京都八坂神社の話がある。

都の祇園殿に、大年の夜、けづりかけの神事とて、諸人詣でける。神前のともし火くろうして、たがいに人兒の見えぬとき、参りの老若男女、左右にたちわかれ、悪口のさまさま云ひがちに、それはそれは腹かかへる事なり⁴⁴⁾

もう一例を挙げる。第八十二代出雲国造であった千家尊統氏は「熊野の鑽火祭」について

この祭りのときは大社からは昔からずっと、長さ一丈もある長方形の餅を二枚持っていくのが例である。これを受け取るために、熊野側からは亀太夫という社人がでる。亀太夫はこの餅の出来ばえにつき、かならず口やかましく苦情をいいたてて、大社の社人はこれに一々謹んで申しひらきをするにしている。そこで出雲では口やかましくいろいろ文句をつける人のことを、昔から「亀太夫」とよんでいる。（中略）私はこれについては一種の悪態祭だと解釈する。（中略）こうした悪態祭は年占の意味がたぶんにあって、この悪態に言い勝つことが、神が人々の願いを受け入れてくれた証拠だとするのである⁴⁵⁾。

と述べている。

こうした慣らわしの背後には、「悪口まつりや神前の滑稽問答は、神人哄笑の罪のない笑いをもとめた古人の知恵であったが、近世では庶民の处世術、口前の技術の訓練と考えられるようになった」⁴⁶⁾と

いう変遷、つまり神事とそこからの馴化という経緯が想定されている。折口信夫は「内地の祭禮の夜にあくたいの伴ふ事があるのは、悠遠な祖先の邑落生活時代に村の死者の靈の來臨する日の古俗を止めて居るのである。勿論我が國農村の近世まで盛んに行はれた村どうしの競技に、相手の村を屈服させることが、おのが村の農作を豊かにするとしたかけあひ・かけ踊りの側の形式をとり込んでゐるのであろうが、主としての流れは、祖靈のそしりにある事と思ふ」としてマレビト信仰の中にその淵源を見ようとしている⁴⁷⁾。また柳田國男は「諺は弓矢などゝちがつて、幾つでも攻撃の仕方がありました。強くも弱くも時と場合によつて、自由に加減をすることが出来ました。つまり相手が閉口といつて、何もいふことが出来なくなれば勝ちであります。(中略)仲間でないものと何か談判をしなければならぬ場合は、出来るだけ多くの氣のきいた諺を知つてゐる者を選んで、戦争の代りに外交をもつて、相手をいひ負かさうとしました。掛け合ひといふのは両方が負けまいと思つて、いろいろ新しい言葉を出して競争することです。何度も同じことをいふ者は、「同じことは一つ事だ」といつて笑はれました。さうするともう一言もないといつて、その場は負けになるのであります。だから不斷から諺の練習をして置く必要もあつたのであります」⁴⁸⁾と述べている。折口は始原の神事性に、柳田は後世の教育性・教訓性にそれぞれ比重を置いているという違いである。

そもそもこの悪口・悪態は日常の価値の及ばない、むしろそれが逆転する非日常の時と場におけるものであることが重要である。八坂神社の例も、野崎参りの場合も、祭礼や参詣においてのみ許されるものであり、「熊野の鑽火祭」も神事の中においてだけ許容されるものである。「元来コトワザ(言技)は言葉によって自分の呪力や威信を示し、敵の魔力に打ち勝つためのものであり、武技と同様に重要な戦いの手段であつた」⁴⁹⁾。悪態とそれが惹き起す哄笑という荒らぶるコトワザの力が神仏に感得されて「祭における悪態は、それによって福運を得たり、豊年を願う予祝⁵⁰⁾」の意義を獲得する。言挙げせぬことを美德とする民が、声高に、しかも日常の規範を逸脱して反秩序の言行に及ぶ時、魂振りの力を発揮する。その結果として神意が発動し、年占となり福運がもたらされるのであり、やがてそれらが娯楽化し言葉戦いを楽しむ方向に馴化していくのである。その意味で、野崎参りの「ふり賣喧嘩」は神意をうかがう側面と娯楽の側面とが同居していると考えられるだろう。

おわりに

田中智彦氏は「近世末、大坂近在の参詣遊山地」をテーマに、「史料としては、一般的な参詣遊山対象を把握するため、近世末大坂で刊行された1枚刷りの案内類」である「参詣見物遊山集」(大阪城天守閣蔵)、「さんけい・見物遊山、命せんだく」(大阪府立中之島図書館蔵)などを分析し、人気の参詣先として、住吉・今宮・難波・生湯・堺・箕面弁財天・曾根崎・本庄・平野について野崎を取り上げている。野崎に続くのは、茨住吉・桜宮・天保山・中山寺・八尾・浦江・河堀口・天下茶屋・長柄・上之宮である。大阪市中からの距離でいえば、野崎は他の人気参詣地に比べやや遠い。ちょうど葛井寺・堺と同じくらいである。

大坂から生駒山・奈良方面には奈良街道(暗峠越え)および中垣内越えが、野崎には野崎道が通じる。これらの街道沿いでは、大坂に隣接して生湯・上之宮・桃谷、そして生駒山近辺に枚岡神社・髪切山・生駒山、稲田・野崎などの参詣遊山地がある。(中略)生湯の22をはじめ、野崎14・上之宮8・桃谷7・枚岡明神7・稲田5・髪切山5など、野崎を除くと大坂に隣接するところに延べ回数の大いなる参詣遊山地が目立つ。(中略)主要地点への距離は、大坂から松原まで3里、奈良までは8里、大坂から野崎まで3里半となる⁴⁹⁾。

とすると、遠距離でも野崎が人気の参詣地であつたのは、他にない特徴、つまり船参りができたという点にあるだろう。片道3里半、往復7里は足弱な老人や女性、子どもたちには相当な負担であつたろう。船を使うことでその負担は大いに軽減されることになる。

近世の都市大坂は、こうした近郊参詣地・行楽地を、市中を中心に円を描くように展開していた。町

人のみならず、近郊農村においても換金作物などの栽培によって収入の増加があり、そこで生まれた余裕が参詣へ、行楽へと人びとを導くことになる。野崎参りの場合、大和川の付替えが新たな景観と参詣路をもたらすという幸運にも恵まれたのであった。

注

- 1) 田山花袋『田山花袋の日本一周（前編）』東洋書院、2007年12月、629-630ページ。
なお「年譜」によれば、花袋は1905年（明治38）、1907年（明治40）、1910年（明治43）と関西に1～2週間滞在しており、本書に描かれた景観は明治末期のものであると思われる。（小林一郎・紅野敏郎編『定本花袋全集 別巻』臨川書店、1995年9月、89-95ページ。）
- 2) 1) に同じ、632-633ページ。
- 3) 1) に同じ、633ページ。
- 4) 『河内名所圖會後篇下』私蔵本。奥付に「享和元辛酉歳冬十一月 皇都書林 出雲寺文治郎・小川多左衛門・殿為八 浪華書林 高橋平助・柳原喜兵衛・森本太助」とある。なお句読点は私に付した。以下同じ。
- 5) 大東市立歴史民俗博物館編『平成二十一年度大東市立歴史博物館 特別展 野崎まいりとお染・久松』平成二十一年五月、8ページ。
- 6) 鳥越文蔵・山根為雄・長友千代治・大橋正叔・阪口弘之校注・訳『新編日本古典文学全集74 近松門左衛門集 ①』小学館、一九九七年三月、207-208ページ。
- 7) 船越政一郎『浪速叢書 第十四』浪速叢書刊行會、昭和二年四月、127ページ。
- 8) 7) に同じ、169ページ。
- 9) 4) に同じ。
- 10) 岡田俊志・三田淨久編『摂陽群談（下）・河内名所鑑（全）（下）』歴史図書社、昭和四十四年十一月、594ページ。
- 11) 大阪市立中央図書館蔵。【】は二行書き割り。以下同じ。
- 12) 4) に同じ。
- 13) 大東市教育委員会『大東市史』、昭和四八年三月、392ページ。
- 14) 5) に同じ、21-22ページ。
- 15) 酒井昭子「野崎まいりは屋形舟で・福聚山慈眼寺」瀬川芳則・櫻井敬夫監修『図説・北河内の歴史』一九九六年十一月、郷土出版社、174ページ。
- 16) 5) に同じ、20ページ。
- 17) 5) に同じ、24ページ。
- 18) 川端善明・荒木浩校注『新日本古典文学大系41 古事談・続古事談』岩波書店、二〇〇五年十一月、359ページ。
- 19) 伊藤正義校注『新潮古典文学集成57 謡曲集（上）』新潮社、昭和58年3月、197ページ。
- 20) 山岸徳平・竹内理三・家永三郎・大曾根章介校注『日本思想大系8 古代政治社会思想』1979年3月、岩波書店、154ページ。
- 21) 20) に同じ、132ページ。
- 22) 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成＜第二期＞4』吉川弘文館、昭和49年1月、354ページ。
- 23) 大橋俊雄校注『法然上人絵伝』岩波書店、2002年5月、116-117ページ。
- 24) 滝川正次郎『日本歴史新書 遊行女婦・遊女・傀儡女』至文堂、昭和四十年十一月、105-106ページ。
- 25) 13) に同じ、395ページ。
- 26) 5) に同じ、24ページ。
- 27) 鴻池義一「大坂の開帳」大阪市史編纂所『大阪の歴史 22号』、昭和62年9月、巻末に詳細な大阪開帳年表がある。
- 28) 「『新版歌祭文』「野崎村の段」の成立について」小川嘉昭『同志社国文学』58、1993年。
- 29) 28) に同じ。
- 30) 28) に同じ。
- 31) 村田路人「宝永元年大和川付け替えの歴史的意義」『大和川付け替え300年—その歴史と意義を考える—』大和川水系ミュージアムネットワーク編、2007年11月、27ページ。
- 32) 山野寿男「大和川付け替えによる河内平野の環境変化」西田一彦監修、山野寿夫・玉野富雄・北川央編『大和川付け替えと流域環境の変遷』古今書院、2008年10月、160ページ。

Mar. 2012

野崎参りの風景

- 33) 5) に同じ, 12ページ。
- 34) 大阪引札研究会編『江戸・明治のチラシ広告 大阪の引札・絵びら 南木コレクション』東方出版, 一九九二年五月, 8ページ。
- 35) 神崎宣武「旅の経済学」旅の文化研究所編『絵図にみる東海道中膝栗毛』河出書房新社, 2006年1月, 147ページ。
- 36) 今井修平・村田路人編『街道の日本史33 大坂 摂津・河内・和泉』吉川弘文館, 2006年7月, 30ページ。
- 37) 5) に同じ, 22-23ページ。
- 38) 泉森皎『河内の古道と古墳を学ぶ人のために』世界思想社, 2006年8月, 64-67ページ。
- 39) 井上正雄『大阪府全志』清文堂出版, 昭和60年7月, 1430ページ。(大正十一年十一月刊本の復刻版)
- 40) 『新潮古典文学集成32 與謝蕪村集』昭和54年11月, 新潮社, 64ページ。
- 41) 石川真弘『蕪村の風景』富士見書房, 平成14年七月, 80ページ。
- 42) 永田龍太郎『與謝蕪村句集 全』永田書房, 一九九一年十二月, 81ページ。
- 43) 桂米朝『米朝ばなし 上方落語地図』昭和56年8月, 毎日新聞社, 203ページ。
- 44) 金井寅之助・松原秀江校注『新潮古典文学集成81 世間胸算用』1989年2月, 112ページ。
- 45) 千家尊統『出雲大社』学生社, 1968年8月, 218-219ページ。
- 46) 宇井無愁『落語の原話』角川書店, 昭和45年8月, 348ページ。
- 47) 「古代研究(國文学篇)」『折口信夫全集第一卷』昭和40年11月, 中央公論社, 24-25ページ。
- 48) 「ことわざの話」『定本柳田國男集二十一卷』筑摩書房, 昭和45年2月, 107-108ページ。
- 49) 福田アジオ・神田より子・新谷尚紀・中込睦子・湯川洋司・渡邊欣雄編『精選日本民俗辞典』吉川弘文館, 2006年3月, 613ページ。
- 50) 神田より子・俵木悟編『民俗小辞典 神事と芸能』2010年10月, 吉川弘文館, 110ページ。
- 51) 田中智彦『聖地を巡る人と道』岩田書院, 2004年3月, 325ページ。

〔補記〕

・引用文中に今日の人権意識からすれば不適切な表現があるが, 時代背景と史料としての性格に鑑みてそのまま用いた。

(2011年11月25日掲載決定)